

タイトル：マムルーク朝文書研究セミナー

日時：2023年1月28日（土）～1月29日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

山下 智也（九州大学大学院 人文科学府 歴史空間論専攻 修士課程）

本セミナーは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の熊倉和歌子氏の企画により、同研究所に外国人共同研究員として来日中のオマル・アリー氏（ソハーグ大学）を講師として開催された。

セミナーは概ね以下のような日程で進められた。まず初日の午前中には、事前に配布されていたテキストをもとに、マムルーク朝期の文書史料にかんする概説的な講義が行われた。70ページにおよぶ講義資料を数時間で駆け抜けたことには少々面食らったが、専門家による重厚な講義は非常に有意義であった。その後は、個別具体的な文書に焦点を当てた講義が展開された。各文書について、最初に各参加者が文書を読解する時間がとられ、その後全員で輪読を行いながら、オマル氏が解説するという形で進められた。二日目にはスィヤーク数字にかんする講義も行われた。筆者はスィヤーク数字に触れること自体初めてであったが、にらめっこを続けているうちに、ほんの少しではあるが判別できる場面もあった。何よりもスィヤーク数字を判別できた際に、オマル氏が片言の日本語でほめてくださったのが嬉しくもあり、印象的でもあった。

本セミナーの特徴として、講義がアラビア語によって行われた点が挙げられる。留学経験のない筆者にとっては、漠然とした不安を抱きながらの参加であった。セミナー初日、最初の自己紹介が当然のようにアラビア語を中心に行われた。史料中の文字には対峙していたとしても、リスニングやスピーキングについてはほとんど修練のない筆者は、冒頭から慌てふためいた。いざ講義が始まると、やはりと言うべきか、オマル氏の口から発せられる生のアラビア語を前に、筆者は圧倒された。重要な箇所については、熊倉氏から適宜日本語での解説が付け加えられたこともあり、何とかついていくことができたが、筆者にとっては非常に新鮮な体験となった。あとから聞いた話では、オマル氏のアラビア語はかなりフスハー（正則アラビア語）に近いものであったらしい。オマル氏の心遣いに改めて感謝するとともに、それにすら気づけなかった自らの未熟さも痛感する次第である。

また、学生同士で交流を深められた点も有意義であった。本セミナーは対面形式で開催されたこともあり、直接的な交流が可能となった。初日終了後の懇親会では、改めて日本語での自己紹介を行い、それぞれの研究などについて言葉を交わした。「マムルーク朝」という共通項を有する学生同士の交流は、中長期的な観点から見ても意義深いものになっていくと思われる。

最後に、講師のオマル氏ならびに本セミナーを企画してくださった熊倉和歌子氏に厚く御礼を申し上げる。